関西農業史研究会々報

No8. 1979・10・6

第21回例会は、9月8日、15名の参加でもって開かれました。7月24日から8月7日までの中国南部農業の調査旅行に関して、スライドや写真、そして参加された方々の印象談などで、楽しい例会となりました。以下に4名の方々の印象記を掲載します。

「中国旅行の印象」　by飯沼二郎氏

今度の中国旅行は、年来の親しい友人たちと心おきなく旅行できたという点で、いままでの十回足らずの海外旅行のなかでも、最も楽しい、最も実り多い旅行であった。献身的に準備と運営をして下さった関西国際旅行社とくに原瀬氏、旅行を共にした友人たち、中国側の国際旅行社や人民公社の人びとに、心からお礼を申し上げたい。

さて、農業経済ないし農業経営の立場から中国旅行の印象を語れということであるが、中国から帰って来て、ほとんどの人から「中国は、これから、うまくやっていけるだろうか」という質問を受けた。そのつど、わたしは、「工業のことは知らないが、農業については、中国政府はかなりうまくやっているようにおもう。少なくとも当分は、農民の不満はうっせきしないだろうし、農業生産はまだまだ伸びるのではないか」と答えた。

ひとくちに人民公社といっても、小は二万人ぐらいから、大は七万人ぐらいのものまで、大小さまざまだが、生産物にたいする政府の代金の40%位が生産費のようで、それから農業税、公益金、積立金を差引いた残りが社員に分配される。公益金というのは公社の経営する病院、託児所、小・中学校(ところによっては高校

から農業短大）の運営費や、貧しい人、やもめなどに支給される社会福祉費、積立金というのは公社の農業や工業（公社は10から40位の工場を経営している）の発展のために使う費用であり、公益金は全収入の3％位、積立金は4～20％位である。

農業税は12％であるが、1962年以来、税額がすえおきなので、農業生産が高まるにつれて税率は低下していき、実際には3～5％位のようである。その反面、政府の農産物の買上げ価格は毎年すこしずつ引き上げられており、たとえばコムギは1961年から1977年までに約9％引き上げられた。一方、政府が公社に供給する生産資材や農業機械類の価格は長期にわたって変わらないし、なかには生産の発展にともなって値下げされたものさえある。（たとえば東方紅28型トラクターは1960年を100とすれば、73年は50になった。）

だから、農民は生産を高めれば高めるほど、確実に収入が増えるわけで、これで増産意欲が高まらないはずはない。その上、日本政府は、農民の収入を所得税という形で一旦は取り上げ、その後、補助金という形で農民に還元するのだが、それには種種の実状とあわぬ条件（何故なら、日本の役人は、村の人々から学ぼうとする姿勢を全く持たないから）がはせられる。ところが、中国では、積立金の使い方は公社の人々の自主性にまかされている。だから、日本では、補助金によって、全国の農村がいよいよ画一化されていくのにたいして、中国では、積立金によって、全国の公社がいよいよ個性化されていくのである。

わたしたちは、今回、七つの人民公社を訪問したが、農業のやり方にしても、工場のやり方にしても、それぞれがきわめて個性的であった。ただ共通している点では、いずれも土地利用の仕方がきわめて集約的なことで、機械化が農業の粗放化をすすめた日本にたいして、中国では、機械化はいよいよ農業の集約化をすすめている。

最後に自留地であるが、1956年に家族人数（赤坊も老人も「一人」として）におうじて1人0.07畝（0.4アール）の土地を分配した。次回は30年後ということだが、現在はまだ決まっていない。自留地はもっぱら自家用の野菜をつくるためであり、余りがあれば町へ持っていって販売し、帰りに肉や魚を買って帰るという、本来、自家用の消費を目的としたものであり、はじめから販売を目的としたものではない。その収入も、せいぜいが、農家の全収入の0.2％位のものだという。

夫が工場で働き、妻が農業をやるという兼業農家の多いこと

にはおどろいた。しかし、その工場は公社の経営であるから、農繁期になると、工員は工場を止めて農業に従事する。つまり、公社の工場は、公社の収入を補うとともに、農業労働の繁閑を調節する役目も荷っているのだ。この点が、同じ兼業農家でも、日本のそれとは全くちがっている。

「中国大陸の植物病害管見」
by上山昭則氏

1979年7月から8月にかけて、広州→上海→蘇州→南京→揚州→上海→広州をかけ足旅行した。この旅行の目的は中国における稲作の実態を把握し、人民公社員の家庭を訪問し、農民の心をつかむことにあった。人民公社7ヵ所・果樹試験場(揚州付近)、農業科学院(南京)、自然博物館(上海)、ししゅう工場、花茶工場、織物工場など計15ヵ所を訪ねた。これと平行して、菌類に関する情報と植物病害の現状を知ることに努めた。

<イネ病害> 上海—南京間では一期作のイネが稔り、これを刈り取りながら、二期作のイネを田植している。(上海付近一期作:5月下旬田植〜7月下旬刈取り、二期作:8月上旬田植〜10月下旬刈取り)立秋(8月8日)までに田植を完了しないと収量がおちるとのことであった。

まず目につくのがモンガレ病。ウンカによる大きな坪枯れでないかと思って田に入ってみると、たいていモンガレ病が大発生し、止め葉にまで及んでいる。イネは丈部分indica(長い米)であるらしく、いもち病の大発生は、今回の旅行では一度も見なかった。ごま葉枯病は西代にはところどころ出ていたが、大きな被害はない。ヒエとイネが混在しているところが多い。農民は案外平気である。

中国では解放後、イネの密植が奨励され、300〜400石/反という収量の報道も以前にはあったが、吉良氏(大阪市大)によって理論的にも実験的にも否定されている。(吉良:『生態学からみた自然』P203〜321)しかし中国人は密植が好きである。広東付近で筆者が実測した値は18×15cm、あるいは1×1m²のものさしの中に8×7株など、明らかに密植である。また株数(穴)はワセイネ1穴5,6,7本、ナカテイネ4〜5本、オクテイネ4

本以上、なお交雑水稲（片親がＩＲＲＩ種）は１穴１本である。（南京の農業科学院において）１穂にはワセ50～60粒，ナカテ60～80粒，オクテ40粒、交雑品種100～150粒（同上）。日本では穂数型80～90粒，穂重型120～150粒が標準であるから、中国のイネは穂数型が多いと言えよう。

筆者はモンガレ大発生田をみて、吉良先生の密植、深耕、多肥と収量との関係を連想した。すくなくともいまの苗密度の60～80％程度で、苗代面積の節約はもちろん、病気にもあまりかからず、収量もそれほど減少しないのではないかと判断した。なお苗代面積と本田面積との関係（南京）は、年１回のとき1:8，ワセ1:5，オクテ1:4.5程度で、苗床は案外広い。

どこに行っても人民公社の責任者は農業の機械化をしたいと唱える。工業はもちろん機械化を主張する。筆者も機械化が必要であり、能率向上の大切なことは痛感している。しかし機械化によって失業を生じさせず、しかもすべての公社員の月給をあげる自信があるのかとまくと、明確な返答はどこでもなかった。

＜農薬＞　有吉佐和子氏の『中国レポート』(1979)にもあるごとく、中国では面積をhaでいうかと思えば、古来からのムー（≒6.7a）で説明するので、説明者→通訳→筆者とわたる間に数字とその単位があやしくなる。農薬に関してはエラにわからない。人民公社の技術員は熱心に農薬名をむつかしい言葉で示してくれるがよくわからない。万国共通の化学構造式を書いてほしいと申し出て通じたことはなかった。

肥料や害虫駆除は大衆討議の後に人海戦術で処理可能かもしれないが、病害に関しては、コレラ発生時の如く、強制防除の必要性を痛感した。とにかく10億人に3度の食事を与えることは大変である。減収は許されない。

農薬を全く使わないというところはなかった。使わないことにしたことはないが、何らかの形で使っている。これは蚊やハエをどのようにして防いでいるかと質問したときも、雑草、ドブ掃除のほか農薬も使うという返事があった。揚州の外人宿泊ホテルでは毎日ＤＤＶＰを室内に散布していると係の人は言っていた。揚州近くの果樹試験場リンゴ園では、害虫害菌用に年10回薬剤散布をしていた。スズメ，シラサギ，トンビ，カラスの類も何故かすくないようだ。

現在の人民公社の農業は水利→品種改良→施肥→病虫害防除

の順に改善がすすめられているようで、これは正しい生き方である。水利制御に成功したところは生産が上っているのが現在の段階と考えたい。二毛作を三毛作可能にしたのは大きい進歩である。洪水がおこらなくなると、いままで以上の施肥が必要になり、優良品種が期待される。病虫害対策が本格的に重要視されるのはこの段階である。つまり、管理集約農業になって生産力が急上昇すると考えたい。

（本稿は上山先生の当日の報告「中国大陸の菌類と植物病害管見」から、徳永の責任で抜き書きしたものである。）

「中国旅行印象記」　by荒木幹雄氏

2週間の中国旅行により、私としては、はじめて海外の実情にふれることができ、多くのことを見聞できた。旅行そのものも、飯沼先生や旅行社、そのほか関係者の方々の御配慮により、限られた日数ではあるが、最大限有効なものとなったことを感謝している。

まず強く感じたのは、現在の中国では解放前の姿は大きく変えられてしまったということである。道路の両側にはいたるところに木がしげり、暑い夏であったが涼しい木陰を作っていた。ところがそれらの樹は、解放後に植えられたものであった。また人民公社でも、現在次々と家屋の建設が進められており、家庭訪問した家は大部分が最近建築されたものであった。さらに、たとえば湾頭人民公社での農業生産力の発達についてみると、ダムなどの建設により水利建設が進められ、二毛作（麦＝10月下旬～5月上旬，こうりゃん・とうもろこし＝5～10月）が、1966年から三毛作（稲－稲－麦）となり、可能な限り耕地が拡大され、農業生産力が大きく発展するとともに、墓地などはなくなり、農村景観も大きく変ってきているのである。要するに、現在を大きな変革のなかの到達点として、どれだけ以前と変ったのかという発達過程のなかで評価しなければならないということを実感させられた。

次に大きな変革過程は、資本主義の変化とは内容が異なるがしかし、技術や生活内容など、多くの点でわが国の現状と比較することはできる。そこでたとえば農業技術水準についてみる

と、防除の水準はまだ高くないと上山兄も指摘されているが、肥料も十分でなく、肥培管理も改善されればもっと反収は上るであろうし、どの人民公社でも農業の機械化が課題として挙げられていたことからしてもわかるように、技術水準もある面では低い。また生活内容も貧素である。たとえば浮頭人民公社では腕時計は10人に1個、ミシンは32人に1台である。このように生活内容でも、物質的な到達水準は低いといえる。生産力の水準は今後急速に高めなければならないと思われた。

しかし第三に、社会経済的には、やはり社会主義の優位性が感じられるところが多かった。1人当りの収入などは確かに低水準であるが、生活そのものは安定している。社会的な保障も行なわれ、家庭訪問でも生活の安定はうかがえた。また全体として計画的に物事がすすめられていることからくるのであろう、現在のわが国を旅行して感じられる町並や村づくりの不均衡、ちぐはぐさは中国では感じられなかった。

以上のような印象を含めて総合的にとらえた現時点で社会主義と資本主義の対比を行なったらどのように言えるであろうか。社会主義中国を訪問して香港へ帰ってきた時、その差の大きかったことに我々一同改めて驚かされ、戸惑った。香港を案内してくれたホテルの中国人のガイド氏は、「中国へ行って住む気にはなれない。朝7時から働いて、昼2時間休み、夕方まで働いて、夕食が終われば政治学習をして、そんな生活はしたくない」と説明していた。確かに香港は住宅事情は悪く、生活するのに楽とは言えないが、しかし一面では華美で享楽的な雰囲気に満ちており、金さえ出せばうまい食事、美しい衣服はすぐに手に入るし、夫人も何人でも持てる。安定しているとはいえ、質素で物資の少ない現在の中国よりいいという考えを持つ人も多く存在する。

しかし、香港で絶えず聞かされた「スリには気をつけろ」「泥棒に出会ったら金をやって追いかけたりするな」「ホテルではノックされても不用意にドアを開けるな」といった話は、中国では考えられない。広州市の夜、裏町を歩きまわって見受けになごやかな一家団らんの風景などより安定した社会の一面をみせるものであった。部分的な事実を捉えて後者を論ずる事は簡単に出来る。自分の見解に都合のよい事実を取り上げようと思えば簡単である。しかし現在、全体として中国の現実を理解し、そこに存在する大きな発展の可能性と現実性を、全体として把握することが大切であろう。これを機会に今後さらに中国に対する認識を深めたい。

「中国の農業水利」by森下一男氏

移動のバス・列車からの大雑把な印象を記してみると、(イ)街路樹並木は鉄道・道路を問わず、都市市街地農村を問わず、路線の両側に見事に発達している。(ロ)クリークの水はシルト粘土分が多いとはいえ随分きれいだった。いわゆる淀んだドブ川の様相を呈していない。(ハ)平坦地では耕地の区画は整然とした矩形で耕地整理が済んでいる。唯農道は極めて少ない様に感じた。(ニ)南京・揚州間では水田の片隅の堆肥づくりの穴(径3〜5m、深さ1.5〜2m)が特に目についた。この中に川泥、厩糞、草、藁を詰めて堆肥をつくる。(ホ)カンガイは長江流域ではクリークからの揚水であるが、クリーク沿いに放置された電動モーターと、専に発動機を載せたものの2種類がみられた。排水は明渠の深い排水路が掘られているのを散見した。

(ヘ)我々の訪中期間はちょうど農繁期に当り一期作の水稲作の刈り取りと二期作目の晩生の田植時期に重なっていた。長江流域ではこれらの農作業が混然一体となって進められていた。灌漑排水完備の裏付けを感じた。苗取、田植、稲刈りと集団作業が殆んどである。(南京十月公社の肥料製造工場では従業員250人の内100人が野良に出ているということだった。)最後の訪問地となった広州では既に刈取が済み、台風通過直後という、ともあったが、水田地帯は一面に湛水エル、代掻苗取田植の段階であった。区画は少し小さく、一区画一人での田植が目についた。排水不良が原因で長江流域の様には農作業が進まぬ様に思えた。

運搬作業は農道が少ないためか、専ら天びん棒で堆肥・稲束が運ばれ、道路に出ると木製荷のりヤカー及びハンドトラクターによるものが主で、車は普及していないようである。尤も、クリークの舟運は十二分に発達している。耕起代掻作業はトラクター あり、水牛あり、耕起機ありで、人力畜力機械力を総動員している。

* * *

どの人民公社も解放前はモばつと洪水に悩まされたという。長江流域の水利建設を南京の十月公社(19055人、4946戸、耕地632ha)にみると、解放後まず水門建設にとりかかり水位調節を達成した。十月大隊(2220人、480戸、耕地88.6ha)には26カ所の水門が設けられているということだった。1965年から灌漑ステーションの建設に取りかかり、公社全体で75ヶ所あるという。公社の農業機械馬力の総計は3155HPに対し、灌漑ス

テーションのモーター馬力のそれは3203HPであって、水利建設にかなり力を注いだことがわかる。

広州の新華公社（71000人、15000戸、耕地5500ha）の水利建設は1958年の三つのダム建設にはじまっている。その内の洪秀全ダム（ロックフィル、貯水量500万t）は1300余haの灌漑面積ミシ。現在までに灌漑用水路100km、堤防70kmと電気排水ステーション（何ヶ所か不明）を建設、現在も進行中。耕地整理は水利が整ったところから始め、凹凸を均平にするのが主であるが、現在40%の進捗率とのこと。

暗渠を150km（面積は不明）施行している上海虹橋公社（3400人、915戸、耕地1316ha）は、耕地の7割が野菜作、3割が穀作であるが、水田の一筆地積は解放前最大でも6ムー（33～40a）であったが、今は約3～4ムー（20～26a）位であり、区画はむしろ小さくなっている様だ。それだけ水の掛け引きが自由になり作付に融通性を持たせている様に思える。都市近郊の野菜作地帯では何処でもスプリンクラーの立ち上がりが見られた。十月公社の話では1976年以後のことであるという。

生産力増大の主要な要因として、集団によるドぶつと洪水の克服とミモ作をどの人民公社でもあげていたが、穀類（コメ、麦）の生産力は上海虹橋公社で13t/ha（1978）、森州長青公社で11.9t/ha（解放前の4倍）、南京十月公社十月大隊で11.9t/ha（解放前の10倍）、珠州沙頭公社で16t/ha（解放前の6倍）、広州新華公社では6.7t/ha（1978）である。

次回・11月10日(土) 2じ～
植村泰夫氏「シャワにおける共同体の展開」